

令和元年6月13日現在

機関番号：15401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K02491

研究課題名(和文) アメリカ作家と共同体との確執

研究課題名(英文) American Writers and Their Conflicts with Communities

研究代表者

田中 久男 (Tanaka, Hisao)

広島大学・文学研究科・名誉教授

研究者番号：30039135

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：アメリカは民主主義の国として市民の平等や連帯を重視する国であるが、同時に、個人主義を大切にし、自由を重んずる国でもある。この二つの理念は、アメリカニズムの中心概念であるが、時に反発し合う様相が、個性豊かな作家と彼/彼女が住む共同体との関係において顕現しやすい。その事例を見ることは、アメリカ文学のキャンオンを形成する作家たちは、自ら住む共同体との摩擦が強くなる傾向を示すのに対し、エスニック・マイノリティの作家たちは、共同体との関係を良好に保つ姿勢を強く持っている。こうした特徴が生ずる社会的、民族的背景を探究することにより、今まで看過されてきたアメリカ文学の大きな特徴を明確にすることに努めた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

民主主義と個人主義という、アメリカニズムの中核にあるこの対立的な理念は、アメリカ文学のキャンオンを形成するルイス、オニール、フォークナー、スタインベック等の作家たちの場合、田舎町の偏狭性と排他性や、アメリカの物質主義的な生き方や人種偏見に対する批判、ピューリタニズムに対抗的な汎神論的宇宙観の提示という形で、社会的病巣に鋭く反応している。他方、レスリー・マーモン・シルコウやトシオ・モリなどエスニック・マイノリティの作家たちは、彼らの共同体の慣習や価値観を尊重するが故に、アメリカニズムの理念と現実との落差に、厳しい批判の目を向ける傾向がある。こうした様相を、具体的な作品の考察を通して跡づけた。

研究成果の概要(英文)：As a democratic nation, the United States naturally emphasizes the ideas of civil equality and communal consolidation, but at the same time is likely to value those of people's individualism and freedom. Peculiarly, these opposing values, which are the dual aspects of Americanism, can collide with each other, and in reality, the examples of harsh collisions are often presented in American literature. As we can easily imagine, canonical writers such as Sinclair Lewis, William Faulkner, John Steinbeck, and Eugene O'Neill have a conspicuous tendency to criticize not only people's biased views, but also their materialistic visions, as revealed in their faith in American success dream, while ethnic writers like Leslie Marmon Silko, a leading writer of Native American literature, and Toshio Mori, a pioneer of Japanese-American writings, tend to esteem their traditional values and customs of their community, a tendency supposedly coming from their tribal wisdom and pantheistic, cosmic visions.

研究分野：アメリカ文学とアメリカ文化

キーワード：リージョナリズム アメリカ南部 ウィリアム・フォークナー アメリカ中西部 アメリカ西部 ジョーン・スタインベック アイリッシュ・アメリカン ユージン・オニール

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

本科学研究費研究代表者は、平成 21 年～平成 24 年(2009-2012)の 4 年間にわたり、基盤研究(C)として、「アメリカ文学における人種と地域から見た階級表象の領域横断的研究」というテーマを掲げて、アメリカ合衆国の東部、南部、中西部、西部という四つの伝統的な地域を代表する作家を選んで、彼らの著作の中に、人種的にも多様なアメリカ社会を映し出す文学作品を綿密に博捜し、それらを階級表象(この視点に、可能な場合には随時、ジェンダーの視点も取り入れた)という視点から読解することを試み、その成果として発表した論文を、「アメリカ文学におけるニュー・リージョナリズム」というテーマのもとに再編・統合し、近い将来に単著の形で世に問えるように修正・加筆しながら、ほぼ全体を見通せる段階にまで研究は進展した。

その研究遂行の中で西部を対象にしたときに、今日のアメリカ社会の民族構成図を変えつつあるヒスパニック系アメリカ人が、これまで WASP (アングロ＝サクソン系白人プロテスタント)中心の社会文化の中で、「ブラウン」で「カトリック教徒」ということで、人種的、階級的に周縁化されてきた様相を歴史的に跡付け、アメリカ文学の中で彼らがどのように表象されてきたのかに注目した。具体的には、ジョン・スタインベックの『気まぐれバス』や『楽しい木曜日』等の作品に登場するヒスパニック系アメリカ人の、マイノリティ感情に心揺れる描写を考察し、次に、ネイティヴ・アメリカン作家のレスリー・マーモン・シルコウの『儀式』等を対象として、先住民たちがアメリカ社会で抑圧されてきた歴史的様相を究明した。同時に、彼らと同じようにマイノリティとして抑圧されてきた民族集団の典型である中国系アメリカ人の代表作家マキシーン・ホン・キングストンの『チャイナタウンの女武者』や『チャイナ・メン』等に、アメリカ社会で人種的、階層的に周縁化されてきたアジア系アメリカ人たちの文学的表象も分析した。

その際、西部の文化的中心地であるカリフォルニア州に焦点を合わせて、ゆかりの作家スタインベックやアルメニア系作家のウィリアム・サロイアンと同時に、サンフランシスコに関係の深いフランク・ノリスを考察したが、野口米次郎と交流もあった彼の代表作『マクティーン』(1899)においてすら、19 世紀末の日本人移民の姿が不可視になっている不自然さが気になり、日系アメリカ文学の原点を探求する必要性を痛感した。その結果、先駆的な作家としてトシオ・モリ(1910-80)を研究する重要性を認識するに至った。そこで平成 25 年～平成 27 年(2013-2015)の 3 年間にわたり、基盤研究(C)として、「トシオ・モリ文学の全体像の構築とジャパニーズ・アメリカニズムの確立」というテーマを掲げて研究を遂行した。このジャパニーズ・アメリカニズムという概念を提唱した意図は、アメリカニズムを合衆国が誇る民主主義や自由、平等という価値観を標榜するナショナリズムの発露として容認した上で、多様なエスニック・アイデンティティを尊重し合うポストモダニズムの時代にふさわしい対抗的なヴィジョンとして、日本人という民族的ルーツにつながる文化的遺産や記憶を大切に継承しながら、正当なアメリカ市民として、国家のナショナリズム宣揚の流れに参加することを促すことである。

この研究の成果を、先述の「アメリカ文学におけるニュー・リージョナリズム」の研究と同様、本の形でまとめられる可能性が見えてきた時に、それらを個別に単独で扱った場合の成果が、期待したほどの大きなふくらみに欠けるように思われた。そこで、これら二つの研究テーマを有機的に結びつけて、さらに踏み込んで発展させるべきテーマがありうるのではないかと考えた。それが今回の「アメリカ作家と共同体との確執」というテーマである。このテーマを個別の作家において追究した先行研究は存在するが、アメリカ文学全体の中で考察した例は見当たらない。このテーマが未開拓のままになっている主な理由は、おそらくこのテーマが、各

作家の地域とその歴史だけでなく、彼ら／彼女らの人種的・民族的背景やジェンダー、あるいは宗教にも関わる奥行き深いテーマであるがゆえに、研究者の間では、まだ手探りの状態にあるということだと思われる。本科学研究代表者は、永年の研究の蓄積を基盤にこのテーマと取り組んで、十分実りのある成果を上げられるだろうと確信したのである。

2．研究の目的

アメリカは民主主義を標榜する国として市民の平等や連帯を重視する国であるが、また同時に、個人主義を大切にし、自由を重んずる国でもある。この二つはアメリカニズムの中心概念であるが、時に反発し合う様相が、個性豊かなアメリカ作家と彼／彼女が住む共同体との関係において顕現しやすいことは、容易に想像できる。実際、アメリカ文学全体を俯瞰してみると、意外に多くの事例が発見できる。それらを見て言えることは、アメリカ文学史のキャンオンを形成する作家たちは、自ら住む共同体との摩擦が大きくなる傾向になるのに対し、マイノリティ作家たちは、共同体との関係を良好に保つ姿勢を強く持っているということである。こうした特徴が生ずる社会的、歴史的背景を探究することにより、今まで看過されてきたアメリカ文学の大きな特徴を明確にしてみたい。

民主主義と個人主義という、アメリカニズムの中核にあるこの対立的な理念は、アメリカ文学のキャンオンを形成するシンクレア・ルイス、ユージン・オニール、ウィリアム・フォークナー、ジョン・スタインベック等の作家たちの場合、田舎町の偏狭性と排他性や、アメリカの物質主義的な生き方や人種偏見に対する批判、ピューリタニズムに対抗的な汎神論的宇宙観の提示等の形で、社会的病巣に鋭く反応している。他方、シルコウやモリなどエスニック・マイノリティの作家たちは、彼らの共同体の伝統的な慣習や価値観を尊重するが故に、アメリカニズムが掲げる普遍的な理念と現実との落差に、厳しい批判の目を向ける傾向がある。こうした様相を、具体的な作品の考察を通して跡づけるというのが、本研究のテーマである「アメリカ作家と共同体との確執」の目的である。見方を変えれば、アメリカの作家は、社会が大きな価値を置く個人主義的な生き方を強く支持しているので、強烈な個性や信念の持ち主が多い。従って、身体的には共同体の一員でありながら、精神的には共同体を批判的に見るアウトサイダーの観察眼を持った存在として、自ら住む環境と衝突し摩擦を起こしかねないことは当然予測できることである。そうした事例を詳細に考察すれば、アメリカ合衆国の文学と社会の特徴を、作家と共同体との確執という視点からいっそう明白にできるのではないかというのが、本研究の出発点での予見であり、目標であった。

3．研究の方法

本研究が科学研究費を受けて追究した、この「アメリカ作家と共同体との確執」というテーマを最も鮮やかに示す作家は、アメリカ最初のノーベル賞作家シンクレア・ルイスである。ノーベル賞を1930年に受賞するほどの評価を当時受けただけあって、中西部ミネソタ州のスモールタウンをモデルにした『本町通り』(1920)は、当時の、そしてまた現在のアメリカ社会全体の体質を考究するには最適の作品である。従って、この小説において、偏狭性と排他性のモデルとされた町の人たちだけでなく一般大衆からも、アメリカ社会の名誉を傷つけたということで、ルイスは怒りと反発を受けたが、その背景を深く理解するために、国民精神の中核にあるアメリカニズムの二律背反的な理念、つまり、民主主義と個人主義の葛藤として跡づけた。ルイスと同時代のシャーウッド・アンダソンも、代表作『ワインズバーグ・オハイオ』(1919)で、オハイオ州の小さな町の住民の内面生活を、孤独と疎外にむしばまれた「グロテスク」な様相を呈した姿として捉え、モデルとされた町の人々との間で緊張した関係に追い込まれた。

北カロライナ州ピードモント地方出身のトマス・ウルフも、『天使よ、故郷を見よ』(1929)において、南部の伝統的な価値観や因習に縛られた偏狭な住民や共同体という、負のイメージを強く印象づける作品を創造したが、『南部の精神』(1941)という南部弾劾の書を著した、ウルフと同地方出身のウィルバー・J・キャッシュの場合には、共同体との軋轢はいつそう激しいものであった。

こうした作家と共同体との緊張した関係は、20世紀前半を代表するシオドア・ドライサー、ウィリアム・フォークナー、アーネスト・ヘミングウェイ、ジョン・スタインベック等の作家の場合には、また違ったかたちで展開したことを考察した。さらに、彼らに先行する19世紀の作家の中で、「共同体との確執、アメリカ社会への批判や挑戦」という観点との関連で、豊かな示唆を与えてくれる代表的な作家は、ヘンリー・デヴィッド・ソロー、ハーマン・メルヴィル、マーク・トウェインだというのが、本科学研究費研究代表者の見解である。彼らを鏡にして上述の20世紀の作家たちを比較しながら研究することによって、19世紀と20世紀のアメリカ文学の特徴のつながりや変遷、地域的な差異も明るみにすることができたと思われる。

一方、女性作家の場合、おそらく宗教的な体質が強い国家ということもあって、家父長的な価値観が根強く支配するアメリカ社会では、女性であるが故にそうした価値観に反発し、社会と摩擦を起こすことは十分考えられることである。そうした例の実相を、ケイト・ショパン、ゾラ・ニール・ハーストン、カーソン・マッカーズ、アリス・ウォーカー等の作家たちを対象にして、ジェンダーだけでなく、人種や宗教の観点からも探究した。

日系アメリカ人作家やネイティブ・アメリカンの作家たちは、ワスプを中心に序列化された白人中心のアメリカ社会では、その人種的、民族的出自のせいで、すでに周縁化された存在であるから、白人作家のように、自己の能力を信頼して個人主義的に生きていくというよりも、みずから身を置く共同体の血縁関係や地縁を防波堤として、民族的なつながりを重視する価値観を基に生活しながら、創作活動をする傾向が強い。こうした傾向は多分に、個人ではなく集団の結束の中で生きるという民族の伝統的な知恵から出てくるだけでなく、人間や社会は自然の一部であるという、キリスト教的な捉え方とは違った汎神論的な宇宙観からも生まれていると推察される。そのことを確証するために、ネイティブ・アメリカ文学のルネサンスを切り拓いたN・スコット・ママデイやシルコウ、その後の世代のルイズ・アードリック、あるいは日系アメリカ人の生活様式を色濃く残している共同体を描いたモリヤ、ヒサエ・ヤマモト、ジョン・オカダ等の二世作家たちの作品を、歴史、社会、宗教等の複合的な観点から追究した。

4. 研究成果

アメリカは民主主義の国として市民の平等や連帯を重視する国であるが、同時に、個人主義を大切にし、自由を重んずる国でもある。この二つの理念は、アメリカニズムの中心概念であるが、時に反発し合う様相が、個性豊かな作家と彼/彼女が住む共同体との関係において顕現しやすい。その事例を考察してみても言えることは、アメリカ文学のキャンオンを形成する作家たちは、自ら住む共同体との摩擦が強くなる傾向を示すのに対し、エスニック・マイノリティの作家たちは、共同体の一員として、自己の帰属社会との関係を良好に保つ姿勢を強く持っている。

例えば、民主主義と個人主義という、アメリカニズムの中核にある対立的な理念は、アメリカ文学のキャンオンを形成するルイズ、オニール、フォークナー、スタインベック等の作家たちの場合、田舎町の偏狭性と排他性や、アメリカの物質主義的な生き方や価値観、あるいは人種偏見に対する批判、宗教的な原理主義やピューリタニズムに対抗的な汎神論的宇宙観の提示と

いう形で、社会的病巣に鋭く反応している。他方、シルコウやモリなどエスニック・マイノリティの作家たちは、彼らの共同体の慣習や価値観を尊重し、諸々の差異を超えて結束する傾向が強いが故に、アメリカニズムの理念と現実との落差に、厳しい批判の目を向ける傾向がある。こうした様相を、具体的な作品の考察を通して跡づけた。

アメリカ国民の精神の中核にあるピューリタニズムは、聖書の「創世記」が説く世界の起源から、終末の千年王国へと向かう直線的な時間の流れというヴィジョンの中で、ひたすら文明の進歩とそれが約束する物質的な豊かさを希求する姿勢を、陰に陽に彼らの心に刷り込んでいったが、そうした繁栄にあずかる白人中心のメインストリームの価値観や生活様式に、スタインベックやオニールだけでなく、フォークナーやアーサー・ミラー、さらには南部農本主義者の一人であるロバート・ペン・ウォレンなども、精神が毒されないように警鐘を鳴らした。

こうしたワスプを中心としたアメリカ社会主流の価値観に対抗的なヴィジョンとして、シルコウやママデイなどの先住民作家たちを中心に、彼らの部族的な共同体の伝統への敬愛や、キリスト教文化圏の単線的な時間概念に対し、円環的な時間観を対抗的に保持していることを、「フォークナーとシルコウの文学的共振のダイナミズム」(『フォークナー文学の水脈』[彩流社]所収)と題する論稿で示した。オニールはアーサー・ミラーと同様に、アメリカの成功の夢が強い物質主義的な価値観の問題を通して、彼らが住む共同体やアメリカ社会のゆがみを批判的に捉えた。このことを究明した2年間の研究成果の一端は、日本ウィリアム・フォークナー協会機関誌への論文連載や、「ユージン・オニールの『氷屋来たる』のパイプ・ドリーム」と題する論文を、学会誌『中・四国アメリカ研究』へ投稿することで示した。

先に、19世紀の作家の中で、「共同体との確執、アメリカ社会への批判や挑戦」という観点との関連で、豊かな示唆を与えてくれる代表的な作家は、ソロー、メルヴィル、トウェインだと述べたが、これらの作家と20世紀の作家との間で、大きな違いが出ているのは、フォークナーたち南部作家を別とすれば、奴隷制度という非人道的な機構に、どのように向き合うかという姿勢の問題である。これについては、一部、日本ウィリアム・フォークナー協会機関誌への論文連載で触れたが、研究は続行中である。

以上述べてきたように、「アメリカ作家と共同体との確執」というテーマは、それぞれの作家の出身地の特徴(リージョンスケープ)を明らかにするだけでなく、彼らの出自と絡まる民族性や社会的階層、および、彼らが出会った時代の表情をも映し出す、アメリカ文学全体を見渡す包括的なヴィジョンになりうる豊かな可能性を持っていることを提示できたと思う。ごく近い将来、この成果を整えて、本の形にしたいと思っている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 6件)

- 田中久男「アメリカ文学におけるリージョナリズム(6)」 松柏社 『フォークナー』第21号(日本ウィリアム・フォークナー協会機関誌) 2019年5月、156-172頁
- 田中久男 「ユージン・オニールの『氷屋来たる』のパイプ・ドリーム 夢想と覚醒のテンションとラリー・スライド」 『中・四国アメリカ研究』第9号、2019年3月、89-105頁
- 田中久男「フォークナーとシルコウの文学的共振のダイナミズム 『土にまみれた旗』と『儀式』の戦争帰還兵のモチーフを超えて」『フォークナー文学の水脈』花岡秀監修・藤平育子・中良子編著、彩流社、2018年9月、127-152頁
- 田中久男「アメリカ文学におけるリージョナリズム(5)」 松柏社 『フォークナー』

- 第 20 号 (日本ウィリアム・フォークナー協会機関誌) 2018 年 5 月、195-208 頁
— 田中久男「アメリカ文学におけるリージョナリズム(4)」 松柏社 『フォークナー』
第 19 号 (日本ウィリアム・フォークナー協会機関誌) 2017 年 4 月、137-47 頁
— 田中久男「アメリカ文学におけるリージョナリズム(3) 我が研究余滴」 松柏社
『フォークナー』第 18 号(日本ウィリアム・フォークナー協会機関誌) 2016.年 4 月、
170-80 頁

〔学会発表〕(計 0 件)

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等 なし

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名： なし

ローマ字氏名：

所属研究機関名： なし

部局名：

職名：

研究者番号(8桁)：

(2) 研究協力者

研究協力者氏名： ロバート・W・ハムリン

ローマ字氏名： Robert・W・Hamblin

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。